

語り手 大原寿美子さん  
(明治40年生まれ)

昭和62年8月21日収録

### あらすじ

昔、財産家の一人子と貧乏人の一人子が仲が良く、どこへも二人はいつしよだった。「大きくなったら旅に出よう」ということになった。

ある宿屋に泊まった。夜、金持ちの子どもは布団に横になると、寝込んでしまう。貧乏な家の子は、眠れないでいると、夜中に女中か奥さんか知らないけれど、襖を開けて来て、火箸できれいに囲炉裏のこみを取って、持って出た粃(あは)を稲をまくようにまいて、灰をかけてならしたら、見る間に、粃が芽を出し、大

## 旅人馬

(八頭郡智頭町波多)



イラスト・福本隆男

## 人びとに好まれる話

茶碗に入れてある。金持連れて行かれた。朝起きれば、この子は食べようとする。とすく田圃をすかせが、貧乏な家の子はそのた。 「実はこうこうじゃ」の友だちがええ友だち

子の膝をむしったりして、貧乏な家の子はその団子を食べさせまいとする。子を食べなかつたから、元の人間にもどす方法を「お父さんは「助けて」

向に気づくことなく食べ、てしまった。いながら、その宿屋を出て先へ行っていたら、朝、その団子がお飯の馬になってしまい厩へ一人のおじいさんがお

きくなつて穂が出た。女は一人のままで「何とか仲間を助けてやろう」と思

「お父さんは「助けて」先には「反畑があるけえ、その一反畑に茄子がいっぱいこと植えてある。東

向いて七つなつとる茄子を七つ食わせたら人間にもどる」と言われた。その子が言われたとお

り行って一反畑を見るけれども、都合よく茄子はなつていない。やと東に生活できるよ

に向いて七つなつている茄子があったので、取って宿屋までもどつて、茄子を一つ食わせ、二つ食

わせ、三つ食わせ、四つ食わせ…とうとう七つ目の茄子を喉から腹へ入れる。金持ちの子と貧乏人

たと思つたら、ころんと馬は人間になつた。二人が無事に家へ帰つた。そ

うな。家の人たちが「おまえらも修行してきたか」と言つたら「こ

山陰地方ではあまり類話に出合えない話である。金持ちの子と貧乏人の子が仲がよいというの

も珍しく、人びとに好まれる。 (元鳥取短期大学教授) (水曜日に掲載)

### 解説